

向き合う



2004年の夏。抱えていた長期の仕事がまとめて一段落を迎えた。「子育てするなら今しかない」。そんな思いで受けた健診で「しこりがあります、気が付きませんでしたか」という医師の言葉に凍り付いた。検査の結果から「乳がん」と分かったのは2004年7月6日。結婚記念日も忘れてしまっ私、がんに関するイベントの日には全て覚えていた。それほど大きな出来事だった。身内のがん患者はみな「くなくっており、私自身も「死ぬこと」

キャンサー・ソリューションズ 社長 桜井 なおみさん ①

しか考えられなかった。「自分が死ぬかもしれない」という一人称の死におびえながら、思い浮かんだのは「親にどう言おうか。仕事はどうしよう。お金はいくらぐらいかかるのか」だった。同じ時期に父親もがんと診断されたばかり。自分のことより母親の心が心配だった。手術、抗がん剤の後、8年間の内分泌療法を受けた。手術前の検査通院や手術入院は、積み立てていた有給休暇で対応できたが、抗がん剤の治療が始まった時点でなくなった。抗がん剤治療に欠勤・減給より、手取りが高い傷病手当金を利用した休職を選び、半年間休職した。休職中、会社との連絡は給与明細の押印のみ。メール連絡も事務的で、仕事に関する内容は皆無だった。「病気にはふれないこと」がお互いに一番と思っていたが、今から思えばそれが良くなかった。復職したときは「仕事の勘」が鈍っていた。

乳がん「死ぬかも」おびえる

病気の前は、会社に寝袋を持ち込んで泊まることもしばしば。定時退勤はほぼなく、社員は「残業が美德」だと思っていた。仕事を通じた達成感は大きく、自身ものめりこんだ。仕事が生きがいだった。

復職したときは「元通り働ける」と思ったし、努力もした。しかし薬の副作用で、だるさや動悸（どうき）などの症状が出た。月2〜3度の通院があり、週5日でする仕事を4日で処理したが、右腕の浮腫や発熱などもあり、身体が悲鳴をあげた。「元通り」にはならなかった。このまま仕事だけの人生でよいのだろうか。足を止めようと思った。

さくurai・なおみ 1967年生まれ。37歳で乳がんを診断され、設計事務所を休職し職場復帰したが2年後に転職。その後キャンサー・ソリューションズ株式会社を設立し、がんでも働きやすい社会を目指す、患者の雇用機会の創出や相談事業に取り組んでいる。